論文の内容の要旨

論文題目　　近世駿河国における建築普請活動に関する研究
氏　　名　　新　妻　　淳　子　（戸籍名：月原　淳子）

駿河国の府中「駿府」は、徳川家康の隠居所としての駿府城と共に整備された。家康は駿府城で薨去し、遺言通り大工中井大和守正清によって久能山東照宮の造営が行なわれた。徳川家祈願所の静岡浅間神社は三度の造営が行なわれ、宝台院等徳川家ゆかりの寺社は幕府の庇護を受けていた。江戸幕府による建築普請は、幕府作事方・小普請方の下で行なわれ、駿府城下の工匠たちの種々の関与も認められる。宝永大地震以降は、度重なる地震等災害によって大規模な修営を行なう必要があった。幕府直轄領「駿府」を中心とした駿河国とその周辺地域においてどのような建築普請活動が行なわれていたのか、幕府の作事組織を踏まえて地元の工匠たちの関わりに着目し、当地からの目線で研究を進めた。また、建築普請に用いられた木材・石材は、どのように調達され流通していたのか、地元産出材の地元使用を中心に検討した。

第 1 部は、駿府における建築普請活動の実態を解明することを目的とし、最初に駿府の工匠について述べた。駿府町絵図から、多数あった職人町の中で、天保期に工匠の集住が認められるのは「上大工町」と「新通大工町」であった。両大工町の大工は、天明期（1781～9）以降、駿府城内外の破損所定式御用を勤め、久能山近辺の火災時には火消人足として急行すること等が定められていた。駿府でも太子講が結ばれ、大工は 10 組、左官は 5 組で構成され、左官の定式御用は 2 番組が勤めた。太子講では組合の規定と作料の決定が行なわれ、安政 5 年（1858）「十組仲間大工規定書」によると、両大工町が仲間規定を破ったため、以降、定式御用や駿府城・静岡浅間神社等御用は、棟梁方の指図により町方大工が勤めることとなった。

駿府における主要な公儀作事として、駿府城、久能山東照宮、静岡浅間神社が挙げられる。駿府城は、大工棟梁中井大和守正清の造営によって完成したが、寛永 12 年（1635）の火災で焼失した。その後再建されるが、宝永大地震、安政東海地震等、幾多の災害に遭いながら幕末まで公儀の修営が行なわれ、駿府の棟梁と工匠たちもその役割を担った。

久能山東照宮は、元和 3 年（1617）に主要な社殿が造営され、寛永期には五重塔建立、宝塔は石造に、社殿・諸堂社の屋根は銅瓦葺きに葺き替えられた。久能山内の諸施設が整えられたのは正保 3 年（1646）であった。その後の主要な修営は、宝永期・宝暦期は小普請方が、明和期以降は作事方が担った。明和 2 年（1765）の修復に、駿府棟梁花村清右衛門他 2 名の参画が判明した。さらに、天保 4 年（1833）の修復見分帳は、駿府町奉行・代官によって作成され、それには駿府の棟梁宗蔵・権十郎が関与している。天保 12 年の地震後、駿府町奉行と使番によって見分が行なわれ、町奉行与力と共に駿府石方棟梁善左衛門・左官方棟梁宗蔵が同行した。翌年の修復は、大工工事の過半が終了すると江戸大工は引き払い、大棟梁辻内近江と駿府棟梁花村源左衛門・花村清右衛門・池田栄次郎の下、駿府大工によって完成された。久能山も安政東海地震で被害を受けたが、翌年の安政江戸地震により修復は延引された。この修復にも、駿府棟梁花村与七郎・花村清右衛門・池田栄次郎が参画している。駿府棟梁及び工匠の名は棟札に記されず、彼らの参画は知られていなかったが、建築普請関係史料によって明らかになってきた。また、安政の修復では、費用の節減と耐用年数の長期化が最大の課題となった。檜は杉に、部材寸法は抑え、土居葺板は杉皮に、根太・梁には松が用いられた。金物や漆塗りも、江戸や日光に倣って仕様が決定された。江戸時代の修営において古木は積極的に利用されており、久能山でも古木の活用や払下げが行なわれた。修復の際には、修復役人や工匠の旅宿として久能山下の寺院と民家が割り当てられ、修復に乗じた商売や金銭トラブルが起きないよう村々へ通達された。

静岡浅間神社は、徳川家の祈願所として家康が造営し、家光によって寛永の再造営が行なわれた。大工頭木原木工允義久の下、駿府の大工棟梁花村長左衛門・清右衛門、屋根葺新五郎・清左衛門が参画している。安永・天明二度の大火により、社殿は全焼し、文化元年（1804）から 60 余年をかけた再建が行なわれた。駿府城代・町奉行を奉行に、寛永期の姿を再現するため、棟梁は寛永造営の駿府棟梁の後継者大工棟梁花村与七郎・花村清右衛門、屋根方棟梁三寺与右衛門・花村富左衛門が登用され、駿府の工匠たちと彫物大工諏訪立川一門によって全社殿が完成された。

江戸時代を通じて活躍した駿府の棟梁に、駿府棟梁花村与七郎家がある。家康在城時から幕府の造営に携わり、駿府城・久能山東照宮・静岡浅間神社の修営を担当した。初代～三代目までは長左衛門、四代目からは与七郎を襲名し、元禄 10 年（1697）遠州一宮・駿州村山浅間の三社同時造営に携わった。小普請方による久能山修復の際、与七郎は修復への参入を嘆願している。

また与七郎は、京都中井・大坂山村と並び駿河の作料・飯米についても関与し、宝永大地震後の駿府城修復では駿府町棟梁組頭として参画した。静岡浅間神社の文化度造営には八～十代目の与七郎が関わり、安政の久能山修復にも携わっている。また、大工棟梁花村清右衛門は、久能山東照宮の三度（明和・天保・安政）の修復、静岡浅間神社の寛永・文化両度の造営に関与した。左官棟梁宮嶋宗蔵は、文政 13 年（1830）から静岡浅間神社の再建掛りとなり、天保期の久能山修復では、駿府町奉行・代官の下で修復見分に携わっている。

第 2 部は、駿河国とその周辺地域における調査から得られた建築普請活動の事例を取り上げた。元禄 10 年、遠州一宮（小國神社・天宮神社）・駿州村山浅間神社の三社同時造営が行なわれた。三社の造営は、大棟梁甲良豊前の下、棟梁甲良次郎左衛門・花村与七郎・松井八郎左衛門が関与した。小國神社と天宮神社は、遠州一宮として両社一体で扱われ、前記棟梁の他に江戸町棟梁 6 名と遠州一宮の大工棟梁高木助右衛門等が両社の棟札から確認できる。

また、富士山西麓の富士宮市の棟札等史料から工匠の建築普請活動を抽出したところ、隣接する山梨県河内地域の工匠の進出がさらに明らかになった。身延大工・下山大工はよく知られるが、その他に波木井大工、甲州川内領大工、薬袋村（早川町）大工、古関村（旧下部町）大工、塩沢大工が確認された。

第 3 部では、建築普請に用いられた木材・石材の調達と流通について扱った。駿河・遠江・伊豆には豊かな山林が広がり、天竜川・大井川・安倍川・富士川の四大河川が流れる。天竜川上流域からは、木材・榑木が河口の掛塚湊まで川下げされて各地へ送られ、榑木は「掛塚榑木」と称された。大井川上流の井川山と千頭山から駿府城・静岡浅間神社・江戸城の御用木が伐出されたと記録に見られる。安倍川上・中流域から切り出された久能山修復御用材は、駿府十分一材木蔵にて改められ、河口まで下げられると、沿岸を通って久能山下に着岸している。安永期には、幕府直轄の「御林山」に御用木となる木材が充足しておらず、天保期には梅ヶ島村管理の「百姓山」から静岡浅間神社へ栂 350 本が伐出されている。富士川上流の甲州からは、久能山修復御用木及び奉納木が伐出され、富士川河口の岩淵村まで川下げされると、沿岸を通り清水湊に送られた。安政東海地震後の久能山修復で、急遽地元調達された諸木は生木であったと記録されているが、現在のところ産出地は判明していない。

石材は「伊豆石」が広く重用されており、久能山及び駿府城へ、西伊豆重寺村の石材が搬送された記録が残る。久能山の天和修復御用石は、淡島から切り出された「あわ島石」で、用途別に加工後船積みし、約三ヶ月で八回に分けて清水湊まで運送された。伊豆石は二系統に大別され、「伊豆堅石」は安山岩系、「あわ島石」は凝灰岩に近い安山岩であったと考えられる。

第 4 部では、駿河国とその周辺の寺社造営における公儀作事について概観し、幕府作事方・小普請方の下、どのような組織で建築普請が行なわれたのかを総括することを試みた。

徳川家康の遺言により大工棟梁中井正清によって久能山東照宮が造営され、秀忠代には五社神社・諏訪神社、府八幡宮の造営（御大工鈴木近江守長次、浜松棟梁）が行なわれた。家光代には久能山東照宮、静岡浅間神社、五社神社・諏訪神社の大造営（大工頭木原木工允義久、駿府棟梁・浜松棟梁）、家綱代は五社神社・諏訪神社修復（大工頭鈴木修理・木原内匠、江戸町棟梁）が行なわれている。綱吉代は遠国寺社の見分・修営が実施され、遠州一宮・村山浅間並びに伊豆箱根権現・鎌倉八幡宮の三社同時修営の運びとなった。

特に久能山東照宮の修復をめぐっては、江戸における幕府作事方・小普請方の勢力関係が反映されている。久能山には日光棟梁に相当する職人集団はないが、作事方の下、駿府棟梁が参画しており、各修復の建築普請方式にも着目した。

五社神社・諏訪神社の延宝度修復には、作事方配下の棟梁として浜松大工の系譜を引く者が派遣され「江戸町棟梁」と記されている。『鈴木修理日記』にも「棟梁」「町棟梁」が併用され、本稿では地元棟梁と区別するため「江戸町棟梁」を用いた。

これまで各寺社における見分は、修営の過程として個別に扱ってきたが、『鈴木修理日記』等の史料によって、江戸中・後期の寺社等見分が幕府の遠国修営事業における一連の見分として実施されたことが明らかになった。具体的には元禄期の遠国十六ヶ所寺社等見分・江戸から五畿内寺社等見分、安永期の駿府・三島見分が挙げられる。作事方大工頭・被官・大棟梁・江戸町棟梁によって、見分・見積・修復が行なわれ、そこに駿府・遠江等の棟梁が協同していることを確認することができた。